輜重兵　第二四連隊	中村　卯之助	大	佐
第二四師団通信隊	保科　清一郎	大	尉
〃　兵器勤務隊	田中　信鵜	大	尉
〃　防疫給水郎	金井　泰清	少	佐
〃　第一野戦病院	安井　二郎	少	佐
〃　第二野戦病院	小池　勇助	少	佐
〃　病馬廠	岩井　吉五郎	大	尉
〃　制毒隊	五十嵐　正二郎	大	尉

第六二師団長	藤岡　武雄	中	将
歩兵節六三旅団	中島　徳太郎	中	将
独立歩兵第一一大隊	三浦　日出四郎	中	佐
独立歩兵第一二大隊	賀谷　与吉	中	佐
〃　第一三大隊	原　定辰	大	佐
〃　第一四大隊	内山　幸雄	大	佐
〃　第一五大隊	飯塚　豊三郎	少	佐
〃　第二一大隊	西村　鴻介	中	佐
〃　第二二大隊	磯崎　幾	中	佐
独立歩兵第二三大隊	山本　重一	少	佐
第六二師団　工兵隊	金木　徳三郎	少	佐
〃　輜重隊	杉本　秀義	少	佐
〃　通信隊	砂川　玄一郎	大	尉
〃　病馬廠	小川　昌美	中	尉
〃　野戦病院	熊倉　寛	少	佐

独立混成第四四旅団長	鈴木　繁治	少	将
独立混成第一五連隊	美田　千賀蔵	大	佐
独立混成第四四旅団第二歩兵隊	宇土　武彦	大	佐（生）
〃　砲兵隊	原　秀男	大	佐
〃　工兵隊	杉本　福次	大	尉
遊撃　第三大隊	村上　治夫	大	尉（生）
〃　第四大隊	岸波　寿	大	尉（生）

第一一船舶団長	大町　繁	少	将
船舶工兵大二三連隊	大島　結男	少	佐
〃　第二六連隊	佐藤　小十郎	少	佐
第五海上挺進基地隊本部	三池　明	少	佐
海上挺進基地第一大隊	小沢　義広	少	佐
〃　第二大隊	∵古賀　宗市	少	佐

〃　第三大隊	∵鈴木常良	少	佐	
〃　第二六大隊	豊福安利	大	尉	
〃　第二七大隊	木村	中	尉	
海上挺進基地第二八大隊	石井清巳	大	尉	
〃　第二九大隊	中本	大	尉	
海上挺進　第一戦隊	梅沢裕	少	佐（生）	
〃　第二戦隊	∵野田義彦	少	佐（生）	
〃　第三戦隊	∵赤松嘉次	大	尉（生）	
〃　第二六戦隊	足立睦生	大	尉	
〃　第二七戦隊	岡部茂巳	少	佐	
海上挺進　第二八戦隊	本間俊夫	少	佐	
〃　第二九戦隊	山本久徳	大	尉	
海上輸送　第一一大隊	森田利吉	大	尉（生）	
〃　第一五大隊	藤嶺正行	少	佐	
第七船舶輸司沖縄支部	平賀又男	中	佐	
船舶通信第二大隊	道野四郎	少	佐（生）	

第十九航空地区隊長	青柳時香	少	将
第四四飛行場大隊	野崎真一	少	佐
第五〇　〃	田村真三郎	少	佐
第五六　〃	黒沢巌	少	佐
第三二軍航空情報隊	塚本保次	大	佐
第二一軍航空通信連隊	小鷲武雄	少	佐

第二八師団長	納見敏郎	中	将
独立混成第五九旅団	多賀哲四郎	少	将（生）
〃　第六〇旅団	安藤忠一郎	少	将（生）
〃　第四五旅団	宮崎武之	少	将（生）
大東島支隊			
歩兵　第三六連隊	須永力之助	大	佐（生）

沖縄海軍根拠地司令官	大田実	少	将
第二二六　設営隊	山根厳	少	佐
南西諸島航空隊	棚町整	大	佐
第九五一海軍航空隊小禄派遣隊	羽田次郎	大	佐
佐世保海軍々需部那覇支部	浜野軍一	中	佐
第二七魚雷隊	白石信治	大	尉（生）

「注」（生）は生存帰還者

（沖縄戦開始以前より沖縄戦終エンに至る迄の
三十二軍及隷下部隊の所在及び行動概況について）

沖縄戦開始以前より沖縄戦終エン（昭和二十年六月二十三日牛島中将自刃まで）に至る迄の、三十二軍各部隊の所在行動については沖縄戦に関する乏しい史実資料より或は当時三十二軍司令部及び各部隊に在って比較的沖縄戦に対する実態を把握して居ると思われる生残りの元将校、下士官兵又は兵事主任等から直接面談或は文書を以て各市町村役所へ調査を依頼して得た資料よりそれぞれ選択記録したものであるが、想像を絶した死斗八十余日の目まぐるしい沖縄戦の実態から各部隊の激しい移動状況を逐一的にとらえる事は困難である上にすでに三十年を経過した今日その細部に亘る的確なる部隊の行動を知る事は到底不可能に近いと思はれるので、大要三十二軍の基幹部隊（二十四師、六十二師、独混四十四旅）及三十二軍直轄隊の主として戦斗部隊についての沖縄、着任から戦斗配備態勢（附図参照）反撃作戦時の態勢、摩文仁終エン時の態勢の概況を記録して見ることにした。

一、三十二軍基幹部隊の沖縄着任時期及所在地

固有部隊名	通称名	着任月日	所在地
三十二軍司令部	球部隊	昭十九年六月一日	真和志市松川
第二十四師団	山部隊	昭十九年八月十日頃	昭和十九年八月十日那覇上陸 同年十二月十日迄師団司令部 嘉手納農林校、中頭、守備、 十九年十二月十一日より二十 年四月十五日迄高嶺村与座、 四月十五日以降首里戦線参加
第六十二師団	石部隊	昭十九年八月十日頃	昭和十九年八月より昭和二十 年四月下旬迄首里浦添、昭和 二十年六月　真壁
独混 第四十四旅団	球一八八〇	昭十九年八月十日頃	昭和十九年九月嘉手納農校、 昭和十九年十一月具志川、昭 和十九年十二月より昭和二十 年五月二十八日迄　第二大里
第九師団	武部隊	四十九年八月頃	当所、首里師範学校 昭和十九年十二月台湾へ転進

註　独混四十四旅団は昭和十九年九月より嘉手納農校に駐留したが約一ケ月程して具志川村へ移動、其のあとに山部隊が駐留した。

二、沖縄戦開始直前の基幹部隊の配備位置

第三十二軍は其の第一線（普天間、東西の線）に六十二師団を、更に臨時編成の前進部隊として読谷村、嘉手納東方に青柳支隊を知念半島方面に独混四十四旅団を豊見城、糸満、名城、喜屋武摩文仁の外廓に二十四師団（山部隊）を小禄方面に、海軍陸戦隊（太田少将の率いる約九、〇〇〇）をそれぞれ配備し、米軍の上陸に備えた。

三、米　軍　の　本　島　上　陸

慶良間列島の攻略（昭和二十年三月二十六日）に成功した米軍は四月一日大型舟艇一五〇隻小型舟艇六隻を以って北中飛行場正面、嘉手納海岸に上陸を開始した。

沖合には数百隻の米艦船が海面を圧した。この地区に配備せられていた臨時編成の前進部隊（青柳支隊）は潰走し、米軍は同日夕刻早くも北中飛行場を占領してしまつた。

註　戦後の米軍資料によると沖縄作戦に参加させる米軍艦船は一四五七隻（内輸送船四三〇隻）に上っていた。

上陸せる陸軍並びに海兵部隊の総兵力は十八万三千を数えた。四月三日には米軍の第一線は三十二軍の主陣地の前線、普天間東西の線に進出し、本島の中部地区は米軍が完全に占領するところになった。

四、三十二軍の総攻撃決行寸前の態勢

四月三日に至り、普天間、東西の線迄米軍の進出を余儀なくされた三十二軍は総攻撃を決行すべく、四月六日其の攻撃準備を完了した。其の時の基幹部隊の配備は、ほぼ左の通りであった。

六十二師団（石部隊）を牧港東西の線に、二十四師団（山部隊）を其の南方第二線に、独混四四旅団を第三線に、海軍陸戦隊を第四線に重畳展開して、攻撃準備をなした。

偶々四月七日午後三時頃米船団二〇隻が新たに牧港沖合に出現したので、側背に対する敵の上陸を憂慮し、かねて持久戦を最も強く固執しつつあった八原作戦参謀の意見具申により決行直前に総攻撃は中止せられた。

五、沖縄戦の特色と彼我の損害

沖縄戦の特色は何と云っても、史上空前の圧到的鉄量を、沖縄本島に完膚なきまでにたゝき込まれ、全島、全く山容をあらため、緑の島は完全に抹殺され、幾多の県民が直接戦斗に参加、其の犠牲になった事であった。

十七才より四五才までの男子を始め、可憐なる男女中学生に至るまで軍命により召集をうけ、戦斗、通信、衛生公報等の各種勤務に参加し、文字通り県民一丸となって斗った。

数万の老幼婦女子もまたこの死斗の渦中に巻き込まれて、将兵と運命を共にした。

本作戦における日本軍は防衛隊員も含めて約九万名が玉砕し更に島民非戦斗員の犠牲は実に十五万に上った。

軍の生存者は七千八百余名をかぞえたがその一半は負傷者であり他の一半の多くは沖

縄作戦終エン後なお坑道陣地に立こもって、抗戦を継続し、その中にはこの年の秋に及んだものがあった。一方米軍の損害もまた四万九千名（内戦死一万一千四百名に達し、米軍司令官ハツグナー中将も六月十八日午後真壁村真栄里陣地に於て陣頭指揮中に斃れた。

六、沖縄戦末期に於ける各部隊の態勢

沖縄作戦は首里を最後の拠点として悪戦苦斗をつづけたが、五月上旬総攻撃の失敗以来、石、山各部隊の主力は四分五裂に陥り友軍は部隊の再編成に困り果てた状態になった。

首里に在った軍司令部遂に五月二十六日南下すべく先発隊を進発せしめ最後の拠点摩文仁村海岸高地に其の位置を移した。つづいて、五月二十八日牛島軍司令官は幕僚と共に摩文仁へ到着高地に陣取った。

山部隊は現存兵力を、真壁、真栄里、喜屋武の地域に石部隊は摩文仁、米須の地域に、独混四十四及球部隊は東風平村具志頭の線にそれぞれ全戦線を南部の一角に収縮した。

六月上旬より、破竹の勢で米軍の攻撃は猛烈を極め、六月十日頃より、友軍は部隊組織を全く失い、石、山、独混、球の部隊のけじめはつかなくなり、各部隊入り乱れ、混沌たる状態になった南部戦線はついに真壁、喜屋武、摩文仁の南端へと圧縮された。軍司令部の最後所在地は沖縄島の眼前に海をフガンする島尻のはてにある。

六月十九日軍司令官は大本営第十方面軍及、南西諸島各部隊、袂別の電文を発信した。袂別の辞の中に特に住民に対して上は老人から下は紅顔の少年に至るまで住民は軍によく協力した、旨の言葉が含まれてあり沖縄戦に於ける、住民の協力が如何に大であり、如何に大いなる犠牲を払わされたかを如実に示されたのである。

六月二十三日沖縄防衛軍司令官牛島満中将は参謀長、長勇中将と共に、摩文仁岳の壕内に於て遂に割腹し果てた。

かくて米軍上陸以来八十三日目に沖縄戦は終幕を告げたのであった。

年	月	日	経過概要
昭和19年	7月	7日	軍、中枢部が沖縄作戦の公算大なりと想定したのは其の頃で、この日はサイパン玉砕の日であった。
	7月	中旬	日本政府はその夜、深更閣議を開いて南西諸島中、あまみ大島、以南の五大島嶼から老幼婦女子の日本々土並びに台湾への緊急疎開を決定して即夜、沖縄県知事宛急電を発し即急実施方を命じてきた。
	7月	下旬	態勢の悪化と共に非常緊急措置が講じられ、老幼婦女子の本土疎開が開始された。
	10月	10日	早朝より、米軍艦載機による大空襲が行われ、其の機数五百機に及んだ。其のため、那覇市は完膚なきまでに灰燼に帰し、読谷、嘉手納、両飛行場及び其の他の軍施設も相当な損害をうけた。

昭和20年	3月	23日	早朝より突如として米軍の艦砲射撃が開始され、慶良間列島及び島尻南部へ砲撃がしきりに加えられた。
	3月	25日	沖縄本島南方七〇、乃至一七〇哩の海域に三群の米機動部隊を認め、沖縄本島周辺の米艦船は七〇隻に達した。 米軍の一部は慶良間列島に上陸して全力を挙げて沖縄本島に対する本格的上陸が企図された。
	3月	27日	「神風特別攻撃隊」と呼ばれた日本軍特別攻撃飛行隊の約十機が最初に慶良間列島海域の米艦船群に対し体当りを敢行した。
	3月	29日	英国太平洋艦隊の一部が主として奄美大島、先島列島方面を攻撃した。 沖縄本島に対する艦砲射撃は一日数千発という熾烈を加えた。
	3月	30日	米軍の一部は神山島に上陸、首里城跡に砲弾の雨を浴せた。
	4月	1日	米軍の本島　上陸開始 午前七時頃から主力部隊を約千五百機の航空機と、千四百隻以上の大小艦船の協力のもとに本島西海岸の嘉手納方面に揚陸、島尻南端の港川方面では艦砲射撃と上陸用舟艇による牽制的な陽動作戦がくりかえされた。 四月一日から二日に亘り第八飛行師団は特攻機（四〇機）爆撃機（十九機）誘導機（二〇機）を使用し嘉手納沖敵艦船に対し果敢な攻撃を加え多大の戦果な報じたが大勢を左右するには至らなかった。
	4月	2日	読谷飛行場と嘉手納飛行場が米軍の手中に落ち更に美里村の桃原や東海岸の泡瀬一帯にも進出を見た。一方嘉手納方面では北谷から残波岬に至る間、米軍はどしどし兵力を増強してきた。 沖縄島最初の上陸部隊は第二十四兵団と海兵隊、第三水陸両部隊でこの二つで米第十軍を編成し其の司令官はサイモン・ポリウア、バックナー中将であった。
	4月	4日	米軍は北谷、島袋、附近から更に大山や宜野湾の線まで進出し、五日には沖縄で一番狭い幅一里位の、石川地峡を遮断し沖縄島を完全に南北に両断してしまった。
	4月	6日	「第三十二軍は北中飛行場に向い攻撃すべし、攻撃開始は四月八日より」との電命により午後二時これに関する命令を各部隊へ下達した。
	4月	7日	海上特攻隊は基地航空部隊の擁護もなく一機の搭載機も持たず猛牛の如く沖縄の敵泊地に突進をつゞけたが、午後零時四〇分と午後一時三〇分の二次に亘り、米艦戦機約三〇〇機の攻撃を受け、戦艦大和を始め主力が沈没した。不沈を誇る六四、〇〇〇屯の戦艦大和が沈没したのは正に午後二時三〇分であった。

	4月	8日	八日頃、日本軍の強力な抵抗をうけて大山、津覇の線に釘付けにされ一日二百ヤード～四百ヤード程度しか前進出来なかつた。前進の血斗は苦難とはげしさを増した。 米軍は戦車約百五十輌と五千の兵力をもって猛烈な砲撃の擁護のもとに大挙して大山南方二粁の嘉数の日本軍を攻撃し彼我の間に砲撃斬込の死斗が続げられた。一方大山南方高地（八五高地）では同高地の奪回をめぐりて寸土を争う肉弾戦が行われた。 神山島より米軍は長距離砲により首里の主要陣地を砲撃した。
	4月	9日	米軍は本部半島の半分を制圧し、更にその翌日運天港と津堅島を占拠した。
	4月	11日	米軍第二十四兵団の一個連隊は那覇北方の日本軍要塞陣地に殺到した。
	4月	12日	大本営から北中飛行場奪回を要望する激しい電報が相次いだ。三十二軍は、十二日夕から攻撃を開始した。 しかし部署と決意の不徹底も禍し却って莫大な損害を蒙って中止した。
	4月	16日	米軍戦車八十輌、兵力約一千が伊江島に上陸、二十日頃概ね全滅した。 十八日同島の戦斗に於いてアメリカ従軍記者アニーパイルが戦死した。
	4月	19日	米軍の行動は急に積極化し、第二十四兵団、第七師団、第二十七師団、第九十六師団の兵力をもって、地上砲兵と艦船其の他集中砲撃の擁護のもとに牧港一帯の日本防築陣地に対し大規模兵力による攻撃を関始した。 即ち米軍は東海岸の津波南方から我如古を経て嘉数に至る東西約六粁の戦線に約一万の兵力を繰り出し死斗旬日に亘りたるために附近の全部落は潰滅し残骸を残すのみとなった。
	4月	22日・23日	石部隊は連日の死斗により戦線の保持漸く危殆に当面しつゝあったので南方（知念半島方面にあった独混四四旅団を第一線（棚原、前田の線）に増強するの余儀なきに至った。城間を占拠された二十五日までには首里東北約四粁の翁長の東北高地から西原南側、城間の北方を連ねる線まで出た。
	4月	28日	朝から米軍は幸地以東の地区でひた押しの攻撃を開始、前田（浦添村）以西の地区では前田、仲間、城間の線に進出した。
	4月	29日	三十二軍は最後の攻撃を決意し命令を下達した。攻撃決行は五月四日と予定され、第三十二軍の全兵力の使用が計画された。

	5月	2日	東海岸中央高地西海岸の三正面を中心に猛烈な攻撃を開始した。（米軍情報確度甲）
	5月	4日	最後の攻撃は予定の如く決行された。しかし戦況の把握が不十分であった上、米軍の砲爆撃に遮ぎられ、五月五日攻勢失敗せるものと認め、これを中止し再び陣地による持久抵抗に復旧した。
	5月	10日	朝、米軍は西海岸で舟艇約六千を以って安謝川を渡河、前田南方高地の奪取を企図した。
	5月	12日	全面的な攻撃を開始し、浦添村沢し北側高地に有力な部隊をさし向け更に戦車四、五十車輌、兵力約二千をもって真嘉比と泊一帯の高地へ浸透し来り日本軍との紛戦が演じられた。米軍は那覇、首里両市の北方と我謝を結ぶ東西十粁の前戦線に第七師団、第七十七師団、海兵第一師、海兵六師、新四個師の全兵力を投入した。一方北中飛行場から基地空軍の協力下に日本軍主陣地帯に対し全面的な総攻撃が出た。殊にその攻撃の主力は首里、那覇の中間地区を指向し同市北方に隣接せる泊部落周辺においては戦車群を先頭に米軍の強力な浸透作戦が行なわれた。
	5月	13日	天久万面の米軍陣地に日本軍は斬込を行なったが、十四日米軍が再び攻撃に出た。那覇の一角、安里に突入、首里の平良町北方高地及び末吉附近にも突入した。
	5月	17日	首里市石嶺町の近くの高地を獲得したが一方浦添の「チョコレート」高地では日本軍の攻撃を撃退した第六陸戦隊が安里川を渡河して市街中心地区に突入した。
	5月	21日	首里の北西寒川「シユンガー」高地は十一回にわたる奪取戦ののち米軍の手に帰した。米軍第一線部隊は二十一日迄、首里市石嶺、大名、末吉及び那覇方面では真嘉比、安里を結ぶ線に釘づけにされたまゝ白兵戦を演じていたが、一方東海岸では海上砲撃を擁護下に戦車を伴い運玉森の東側日本軍陣地内に浸透、更に与那原に進出し、首里を後方から鋏撃しようとする企図に出た。 三月二十八日以後五月二十一日まで沖縄の地上戦斗並に海上擁護作戦に於て米軍はすでに戦死八千三百人の犠牲者を払い戦傷者は二万二千人を超えた。 米軍は科学的優勢を利して空母、航空兵力を基幹とする異例的な水陸両用攻撃兵器を生み出したが、日本軍は集中砲火の中で決して尋常な手段では対抗せず少なくとも米軍側の最初の希望を修正させざるを得ない異例的な逆襲法に出た。地上における決死的な洞穴作戦と神風攻撃との結合によって米軍の犠牲者は益々大となった。これは東京への道のはるかなものと思わせるものであると米紙は報じた。